

木村熊二の足跡

—その基督教〈回心〉及び小諸移住について—

下山 嬢子

はじめに

本論は、木村熊二の足跡について、筆者がかねてより疑問に思っていた二つの点について調査した結果を報告するものである。一つは、熊二の滞米時代のキリスト教における〈回心〉の内容詳細についてであり、もう一つは、時代にあつて最も優れた女子高等教育機関としての明治女学校を設立したものの、それを途中で巖本善治に任せ、信州に移つて小諸義塾開塾に至るそのプロセスについて、熊二の年譜において詳らかにされていない点である。

幕臣であつた木村熊二は明治三年十二月に渡米し、同十五年に宣教師となつて帰国した。妻鎧子と共に明治女学校を創立したが、間もなく信州に移住し小諸義塾を開いたこと、島崎藤村との師弟関係があることなどからよく知られている人物である。しかし、その日記(『木村熊二日記』)は、肝心の滞米中の約十年間が欠落しているために、彼のキリスト教信仰入信のプロセスが殆ど明らかにされて

いない。筆者は、数年に亘る『日記』の解説・書写に当初から関わつた事情もあり、これらの点について疑問を抱いていたが、平成二十七年八月二十二日、小諸市における〈藤村忌〉の「講話」を依頼され、それを機に長年のこれらの疑問について調査をした。ここでは、併せて藤村年譜と熊二の日記との照合についても触れておきたい(注一)。

一 事実と虚構

—藤村年譜と『木村熊二日記』—

かつて、青山なをは「木村熊二と島崎藤村」(東京女子大学『比較文化』昭和三十七・二)において、明治三十二年十月九日付 田口卯吉の熊二宛書簡を元に藤村と熊二の関係について次のように述べた。

小諸義塾ヲ中学校ト為スニ付校長資格ノ事ヲ問合可申様御伝言有之候ニ付文部省ニ問合候処私立中学校之校長ニハ資格ノ必要

無之趣二有之候右及御通知候【注】（「注」…「岩石の間」（大正元年九月『中央公論』）（桜井先生が言う）「…それに、君、吾々の塾も中学の設備をして、認可でも受けようといふには、肩書のある人が居ないと一寸これで都合が悪いからネ」とある）

以上の手紙の関係には、不明な点が残されてゐるのであるが、それはそれとして明瞭に看取される一事がある。熊二の藤村に対する信頼の深さである。彼はこの重要な、また機密に属する要件を藤村に托して、田口に直接面会して問はしめたのである。島崎春樹は十分に彼の代理をつとめる者とされ、かつこの誇るにたる弟子を、義弟田口に紹介しておく機会もしたかのやうである。以上のやうな事柄が積み重なってくると、木村熊二と島崎藤村との間柄は、私が考へてゐたよりも、ずっと深いのかも知れない、といふ気がだんだんしてくる。（中略）藤村が父といひ子といふのは、今まで私が考へやうともしなかつた深い広い経験と実体から出たのかもしれないと、驚きの目を見はつたのである。

ここで青山は、熊二の藤村に対する信頼の深さについて述べているが、一方、「浅間の麓」（『力餅』昭和十五年十一月、新潮社）の以下の部分を挙げて、藤村年譜の記述と、回想的作品内記述との齟齬についても触れている。「浅間の麓」には次のようにある。

木曾福島の姉の家から東京の方へ帰つて行く時のことでした。

わたしはその途中で信州小諸に木村先生の住むことを思ひ出しました。（中略）先生が信州の田舎に退かれてからはお目に掛る折もなかつたので、久し振りで先生のお顔を見たいと思ひ、小諸の耳取といふところにある先生の家を訪ねました。わたしが小諸の土を踏んで見たのも、それが最初の時でした。

引用最後の一文「わたしが小諸の土を踏んで見たのも、それが最初の時でした。」について、青山は、「相当に虚構の上に立つ」全く事実と相違してゐる」「藤村の自伝的叙述の中に事実らしき虚構のあることを、私は肝に銘じてしつたことである。」と、烈しい調子で述べている。この青山の文章の根拠が何に由来するかと言えば、藤村の自伝的作品と『木村熊二日記』（まだ公刊されていない時期で、青山はオリジナル資料を基にしている）の記述との対照に拠ると言えよう。青山はそこに齟齬を発見し、相当驚いたものやうである。そこで、まず『木村熊二日記』の記述と藤村との関係について、出来るだけ明確にしておきたい。

木村熊二は弘化二年（一八四五）出石藩の儒臣桜井氏次男として出生、幕末に聖堂都講であつた御家人木村苞山の養子となり、その後、昌平坂学問所に学び、幕臣として長州征伐にも赴いている。明治三年、森有礼の一行に加わり渡米、ニューヨーク・ホープカレッジに学び、次いでニュージャーシー・ニューブランズウィック神学校に入り、牧師の資格を得て明治十五年に帰国した。帰国後は、教会牧師を務める傍ら、妻澄子と共に明治女学校を創立した他、各

学校での教師生活を続けたが、明治二十五年一月信州に入り、同二十六年末に小諸義塾を開塾した。明治女学校設立の際、協力を惜しまなかつた妻鏡子は、田口卯吉の異父姉である。しかし、鏡子はコレラの為明治十九年没した。その後、熊二は四十三歳で伊藤花（華）十九歳と結婚するも、同二十八年末に離婚、東儀隆と三度目の結婚をした。昭和元年（一九二七）に没したが、日記は慶応二年（一八六六）八月一日から、昭和二年一月五日まで断続して続き、渡米時代一部の英文日記も含まれているが、惜しむらくは、滞米中の日記は殆ど欠落（明治四年末〜明治十三年が欠落）していることである。

まず『木村熊二日記』から、藤村が明治三十二年春に小諸義塾の教師となつて赴任するまでの藤村関係の主な記述を拾い出してみると、次のようになる。（以下、「」は『木村熊二日記』の記述そのまま。その他は下山が補つたもので、熊二を主とし、藤村関係部分は網掛けにした。）

明治三年 熊二（二十五歳）森有礼の渡米に際し、留学生として一行に加わる。

明治五年 受洗。（熊二の他、大儀見元一郎・津川良蔵も同時に受洗）

明治十二年五月 ミシガン州ホープカレッジ（ハーランド）卒業。

（注二）

十二年九月 ラトガス大学ニューブランズウィックの神学校にて学ぶ。

明治十五年初夏 熊二（三十七歳） 宣教師の資格を得る。

” 年九月 熊二帰国。種々の学校で教師。〔藤村は共立学校

で熊二の教えを受ける〕

明治十八年秋 妻・鏡子（田口卯吉の姉）と共に明治女学校創立。

明治十九年 妻・鏡子コレラのため急逝。

明治二十一年 熊二（四十三歳）台町教会を司牧。頌栄女学校でも教える。

明治二十一年五月 熊二、伊藤花（華）と再婚。（海老名弾正司式）

明治二十一年六月十七日 藤村は熊二により高輪台町教会において

受洗。熊二の本懐の仮寓に下宿したが、桜の実の熟

する時に描かれた牧師夫妻はこの時期のもの。

この間、二十二年十一月から二十四年十一月までの間

に、島崎の名前は二十回出て来る。在京時、最も

密に往来があつた時期に当たる。】

明治二十五年一月 熊二（四十七歳）信州に入る。南佐久で伝道開始。

明治二十六年末 熊二（四十八歳）小諸に移る。小諸義塾開塾。

明治二十九年一月 熊二、花（華）と離婚。

明治二十九年三月一日 嶋崎春樹来訪

明治二十九年三月二日 嶋崎牧野子同行懐古園并関五太夫を訪ふ

明治二十九年三月四日 朝嶋崎春樹帰京 金貳拾円借し渡す

六月 日返金

明治二十九年秋 熊二、東儀多賀(隆)と三度目の結婚。

明治二十九年十月 藤村は母の納骨のため馬籠へ帰省 帰途小諸に

戻る。

明治二十九年十一月七日 島崎春樹来宿 関五太夫へ金拾五円返

附

明治三十一年四月 藤村は小諸義塾の教師となり、泰フユと結婚。

明治三十三年九月〜明治三十四年七月「めぐみの旅路」(聖書の研

究)

明治三十八年春 藤村は「破戒」草稿を携え、家で上京。

青山なをが、熊二と藤村を親子関係に擬したように、親しい間柄の故か、明治二十九年三月と十一月には、金銭の貸借関係も窺えるのであるが、これは、小説『春』にも描かれたような、島崎家の長兄がある事件に連座して未決入りし、最も経済的に困窮した時期に相当する。藤村が仙台の東北学院教師として赴任する前後のことでもある。前述の「浅間の麓」の「小諸の耳取といふところにある先生の家を訪ねました。わたしが小諸の土を踏んで見たのも、それが最初の時でした。」というのは、明治二十九年十月の母の納骨の帰途のことであり、同年三月の小諸訪問には触れていない。藤村の記憶違いでないとすれば、子供向け童話の『力餅』では事実を脚色し

たとも考えられる。おそらく後者であろう。

また、同年十一月七日「島崎春樹来宿 関五太夫へ金拾五円返附」とあるのも、関五太夫から借りたのは藤村で、おそらく熊二が間に立ったのではないかと推測されるのである。関五太夫は、藤村と同時に受洗し、明治学院にも同時に入学した小諸出身の青年であり、実家は資産家であったという(注三)。

一方、藤村の『千曲川のスケッチ』に描かれた熊二の面影は、次のようである(例示①〜②)。

① 兎に角、先生はエナアゼチックな勇健な体軀を具へた、何か為すには居られないやうな人だ。斯ういふ氣象の先生だから、演説でもする場合には、やゝもすると其飛沫が医者仲間なぞにまで飛んで行く。細心な理学士は又それを心配して私のところへ相談に来るといふ風だ。(御辞儀)

② 先生は共立学校時代の私の英語の先生だ。あの頃は先生も男のさかりで、ア、ギングの『リップ、ヴァン、キンクル』などを教へて呉れたものだ。その先生が今では斯ういふところに隠れて、花を植ゑて楽しんで鉢泉に老を養つたりするやうな、白髯の翁だ。どうかすると先生の口から先生自身がリップ、ヴァン、キンクルであるかのやうな戯談を聞くこともある。でも先生の雄心は年と共に銷磨し尽すやうなものでもない。客が訪ねて行く

と、談論風発する。(中棚)

①も②も傍線部分に見るように、熊二のエネルギーで意気盛んな様子が窺える。①などは、小諸というまだまだ封建的な地方の町にあつても、自由闊達に振る舞つていた熊二の姿が目につかぶようでもある。「医者仲間」という土地の有力者たちの面子など構いなしに、彼等に批判を加えるような熊二のあり方が、藤村にとつては、いつの間にかその後始末のために動かざるを得なかつた出来事として記録されている。(「社会」の無言の圧力に対する藤村の姿勢が見られるエピソードでもある。

二 熊二の小諸移住の理由

『木村熊二日記』の記述は、基本的に、日付・曜日・天気・出向いた先、来客等、極めて事務的な覚書ノートの意味合いが濃い。幕末の士族の子弟らしく、具体的な出来事に対しての個人的な感情・感想などは少ない。しかし、そういう中であつて、明治二十五年の信州への移住については、その理由が、鑑子との間の一人息子祐吉の不始末によつて引き起こされたものであることを窺わせる記述が連続する(妻花の病氣にも言及してはいるが、それが主たる移住理由とは考えられない)。そして、そのことは、これまでの熊二年譜においては、殆ど詳らかにされていない。以下、具体例をいくつか挙げて見ていきたいが、それは明治二十三年十月から翌年三月迄続

く(例示は③、⑥)。

③ 明治二十三年十月三十一日

祐吉金三円を請求す。(略) 祐吉已に二十四なれと碌二一事を為さず常に金を請求す可歎なり吾か家は已に彼の為め抵当物となりたり花八常に婦人病にて日夕顔を開きたる事なし

④ 明治二十四年一月二十三日

人の生涯の不幸八年老ひて児子の為めに困めらるゝ程烈しきことハなかるまじ(略) 今や多年の困難を経過し世途の険を跪渉して初めて居を高輪に占め予め終焉の計を為さんとせしに豈計らんや妻八婦人病にて家事を整頓する能す祐吉八身に病あるを奇貨として終日一事を為すを欲せず無理無分別之負債を為して吾を困めんと八家居ハ已ニ彼か負債の為に抵当物となり数歩之圍庭へ意を注ぎて植付し無数の花木も不日他人の有とならんとす吾八年の老るに随ひて枕を高して安寝する地も無きに至らんとす可歎なり

このように、祐吉は定職に就かず、病身を理由に借金まみれの状態で、父熊二の家屋敷は抵当に入つていた。祐吉は発狂を装つて田口卯吉(母方の叔父)の家はまだ押しかけた(同二十四年一月二十九日)との記述まである。そして、この苦難は熊二の牧師の職にまでその影響が及ぶようになったことが次の記述で明らかになる。

⑤明治二十四年一月二十八日

我台町教会へ牧するにおよんで他に負債を為すことハ甚注意致し居しに去年十一月以来祐吉之為め行処種々負債出来し加るに家内不如意之勢を招き今日ハ牧会之任に堪ざることを感したり全能之神我と共に在して我を助けたまふことなくハ我ハ夙に牧師の任を辞へしと決定セリ

「行処種々負債出来し」とあるように、知り合いの悉くに負債をこしらえていることが判明し、「全能之神」がこの事態を救うことなくば、牧師の任も辞す、との決意が示されている。そして、この秋の信州への伝道旅行が、こうした熊二の危機を結果的に救うこととなった。

⑥明治二十四年十月二十五日

横川(略)仙境に入りたる心地(略)天父の恵謝するに余りあり我は夕深く感する所あり主イエス我か罪惡の魁たるを赦して我をしてかく地方へ伝道せしめ其の至る処多くの収穫を与へて我か愚なる説教にも霊を置きて衆人を奨励するに適せしむるハ嗚呼また何の幸ぞ謹謝恩寵の深きを覚ふ

碓氷峠の横川辺りから、自然が「仙境」に喩えられ、伝道旅行の計画自体に、神の導きを感じている熊二がいる。このような「主イ

エス」とか「天父の恵」とかの表現自体が、極めて珍しい部類に属することは、『木村熊二日記』を通読すればよく理解できよう。自らの人生に関わるものとしての「主イエス」「天父」という認識である。

そして熊二は、明治二十四年末を以て台町牧師の任を解かれ、翌二十五年一月四日、品川停車場から信州に向けて出発した。野沢の並木家に仮寓し、その後、小諸義塾開塾は約二年後の明治二十六年十二月一日のことであり、伝道の傍ら、地方における新知識としての要望に応える形で、教育に携わっていくこととなる。

三 「めぐみの旅路」と

内村鑑三・藤村

既に述べたように、熊二は、自らの感情、感想の類を殆ど公にすることを好まない性格であり、書簡は別として(注四)、『木村熊二日記』の中で、一子祐吉の不始末や二番目の妻花との離婚について書き留めているのは例外的なことである。

そういう中であつて、自らのキリスト教入信、信仰について、熊二が公に記しているものは、わずかに「めぐみの旅路」のみと言つてもいいだろう。この回想記だけが、その間の事情を彷彿とさせるものを含んでいる。これを基礎資料として言及したものは、青山なを(注五)、工藤英一(注六)、太田愛人(注七)、高塚暁(注八)の四

氏である。特に工藤、高塚二氏の論は詳細ではあるものの、本稿では熊二の〈回心〉について、更に言及しておくべきと思われる部分について紹介する次第である。

『聖書之研究』は、明治三十三年九月創刊の内村鑑三の個人雑誌である。熊二は、この第四号（十二月）から第十一号（明治三十四年七月）まで、全八回に亘って「めぐみの旅路」を連載した。『聖書之研究』は、無教会派キリスト教徒内村の信仰の実践としての伝道雑誌である。内村の弟子・坪上賢造の「創始者としての内村鑑三先生」（注九）によれば、『聖書之研究』は「我国最初の聖書雑誌」であり、「何ら団体の支持もなく有力なる背景もなくしてたゞ一介の個人によりて始められたのである。これ実に我國の基督教史に特筆大書すべき、画時代的事件であつた。私の記憶にして過たずば、『六号雑誌』『福音新報』の如きはこれ以前に創刊されたものではあるが、いづれも団体的背景を有し、かつそれは基督教雑誌であつて、聖書研究を主題とする雑誌ではなかつた」とある。『六号雑誌』は小崎弘道が、『福音新報』は植村正久がそれぞれ中心となり、基督教に基づく総合雑誌、機関誌としての性格を持つ点からすると、坪上のこの指摘は極めて正確である。その創刊まもない自らの雑誌に、内村は熊二に寄稿を依頼した。「内村君の懇切なる言を黙々に付しざるべきにあらねは」と熊二は最初に書いている（以下、「めぐみの旅路」例示⑦～⑭）。

⑦ 過こし方のことと書きつらねよそは余か生涯ほどおかしきものはあらず封建の死にたる世より明治の活世界に跨りて飛鳥川淵瀨定めぬ世の状態を見もし聞もしあれば何となく興あるわざになん殊に基督教の信徒として世になしたる実歴には或はとるべきこともありなん（一）

このように内村は熊二に執筆を勧めたのである。「飛鳥川淵瀨定めぬ世の状態を見もし聞もしあれば」とは、幕末から明治維新の動乱に巻き込まれ、幕臣として戦い、その後渡米して十数年を過ごして帰国した、という想像を絶する体験ではあるが、「殊に基督教の信徒として世になしたる実歴」を書いてみようという点に、内村のポイントがあつた。結果的に内村は、熊二のキリスト教信仰に関して最も重要な核心をつく回想記―しかも唯一の―を書かせることに成功したのである。在米十数年の後、新知識となつて帰国した熊二は、種々の方面から大いに囑望された人材であつたはずだ。にも拘わらず、華やかな世の活動に背を向ける形で信州小諸の人となつた彼に、その信仰の道筋を明らかにすることを求めたのは、内村の基督者としての洞察力であつたと考えられる。

*

一方、藤村にとつて明治三十三年から三十四年の時期は、小諸義塾の教師として赴任し、結婚して一家を構えた頃にあたる。彼の文学的活動は、最後の詩集『落梅集』と合本『藤村詩集』の編集であ

り、また同時並行的に西洋文芸を多読し、後に『緑葉集』に収録されることとなる短篇小説に手を染め始めたばかりでもあった。青年時代の欧風熱の一環とも言えるキリスト教入信と、そこから離脱した藤村の眼に、恩師でもあり義塾の校長でもある熊二の（信仰告白）とも言える重要な文章は、これだけ直近の距離にありながらも届かなかつた、と言つていい。藤村側からの「めぐみの旅路」への言及は皆無である。後に藤村は「桜の実の熟する時」において、自らの青年期のプロテスタント信仰を振り返り、印象的な次の述懐をすることになる。

お前はクリスチャンか、とある人に聞かれたら捨吉は最早以前に浅見先生の教会で洗礼を受けた時分の同じ自分だとは答へられなかつた。日曜々々に定つた会堂へ通ひ説教を聞き讚美歌を歌はなければ済まないことをしたと考へるやうな信者気質からは大分離れて来た。三度々々の食前の祈祷すら廃して居る。では、お前は神を信じないか、とまたある人に聞かれたら自分は幼稚ながらも神を求めて居るもの一人だと答へたかつた。あやまつて自分は洗礼などを受けた。もし真実に洗礼を受けるならば是からだ、と答へたかつた。（四）

「浅見先生」のモデルは勿論熊二である。「あやまつて自分は洗礼などを受けた。もし真実に洗礼を受けるならば是からだ」とは有名な箇所であるが、（新生事件）を潜り抜けようとしてゐる五十歳間近の藤村の、二十代の青年時代を回想しての感慨が混じり込んでい

るとも推測される（注十）。

四 ヘルプス夫人

さて、熊二の信仰を導いたのはヘルプス夫妻である。ホープのあるハーランドは、オランダ改革派教会の根拠地であり、ヘルプスはホープカレッジの初代学長であつたが、その夫人と共に、木村熊二と大儀見元一郎の二人の日本人留学生の生活、教育面、全てに亘つて親身な世話をした。ヘルプスについては「愛あるヘルプス師の薫陶は余か靈性に生命を与へたるものといふへし」（一）と熊二は述べているが、その指導、教育における献身と愛の徹底ぶりは、殆ど驚愕すべきものだつた。そして彼以上に、英語を殆ど解しない日本人留學生に対するヘルプス夫人の役割の重大さをまず見ておきたい。

⑧余に聖書を授け祈祷を教へ殺氣凛々たる武夫をして平和なる十字架の兵卒と為して再び本邦に帰航せしめたるは夫人が熱篤なる日曜学校の教導と熱誠なる信仰によらずんばあらず（二）

熊二が渡米して直後は、自らを「殺氣凛々たる武夫」と認識していた。しかし、その彼を結果的に「平和なる十字架の兵卒」と為して「再び本邦に帰航せしめた」のは、夫人の懇篤、熱誠の信仰であつた、と熊二は書いている。

⑨夫人常に余に告げて曰ふ子が基督を信すると信せざるとは予に於て何かあらん予は子を基督に紹介するの務あり子は未だ人世の最大幸福てふことを理解せざるものゝ如し云々(一)

夫人はまず「人世の最大幸福てふこと」について触れる。熊二はこの頃、「窃に夫人の言を咲ひ居たり」と言うように、心中密かに夫人の言うことを「咲」(わらう)口を細めてほほと笑う―引用者注)つていた。「人世の最大幸福てふこと」についての夫人と熊二の懸隔の甚だしきは推して知るべしであり、次の引用でもそれは明らかである。

⑩余は世に幸福を希ふものにあらず余には住する国もなく家もなく妻児もなし天地の浮浪人にして偶然こゝに流寓漂泊するものなり幸に他日天日を見ることを得は薩長の奴輩を塵殺するの外は望も快樂もあることなし臥薪嘗胆は余の夙に甘する所なりと(一)

このように、熊二は最早再び日本に帰国することがかなうかどうかどうかも不明のまま、渡米したようである。自分の「望も快樂も」「薩長の奴輩を塵殺する」ということの他にはない、というような憎しみの塊であり、「臥薪嘗胆」の心で一杯であった。このような熊二に、夫人はある日、次のようなことも言った。

⑪子は異郷の客なれ風土の異なるより疾病にかゝり易し宜しく注意すへし思ふに子は已に思郷病にかゝれり子が惨憺たる旅情を慰藉するは単に基督あるのみと(一)

あなたは異郷の地にやってきたので、ホームシックにかかつていゝるのではないか、それを慰められるのは基督しかいない、と。熊二はまた「咲ひたり」とある。まるで、旧約聖書のサラのよう(創世記十八)だが、この時の熊二の心中は次のようだった。

⑫余は溝壑に転死するも甘するものなり余には夢たにかよふ故郷もなし何ぞ思郷病あらんや(一)

日本を捨てる覚悟で渡米した現在、自分に故郷なぞない、故にホームシックなどに掛つてもいけないのである。渡米して二年くらい経過していた頃のことである。英語も上達して来ていたが、熊二の基督教に関する認識はこの程度であった。

⑬少壮より学ひ来りたる孔孟の道の深く余か心底に沈潜して他はこゝとくく排除して入るをゆるさゞりき基督教は仏教に類するものと誤解し聖書は好書なれとも真神の黙示にあらずと思ひ居たり左れと余は人生の不善なること失望多きこととは常に信せり

「孔孟の道」にどつぶり漬かっていた自分の意識は拭い難く、また「基督教は仏教に類するもの」と思っていたこと、聖書は好い書物ではあるが「真神の黙示にあらず」とも思っていたこと、そして人生とは「不善なること失望多きこと」と固く信じていたことが書かれている。夫人の言う「人世の最大幸福てふこと」など、この時期の熊二にとつて殆ど理解を絶することであつただろうと思われる。

ところが、ある日曜日の夕方、熊二が教会から戻つても校内（多分寄宿舎）に人は少なく、一人で聖書を開いて牧師の説教について「考究」していたところ、突然、妻子のいる静岡の家の辺りにいるような気がした。垣外から家中を見ると、妻は糸車を繰りながら子供に勉強を教えている姿が見え、貧苦の中にも士族の生活を送っている妻子の姿に熊二は「大に感したり」というのである。勿論この場面は、ふと導かれたイメージ（白昼夢、幻想）である。彼は日本の「地は再び踏ます」と決心していたので、妻子とも「生別離」をしたと思つていた。にも拘わらず次のような場面が続く。

④彼等は余か心を知らず指おり教そへて余か還家の日待ちつゝありと思へは鉄腸も寸断せらるゝ心地せり今や内に入らんとせしに後方より余を呼ぶ者あり顧みて其の人を見ればこはそも一場の夢にて友人大儀見氏傍にありて余を喚醒せしなり（一）

夫であり父でもある熊二の帰国をひたすら待つてゐる妻子の姿を目の当りに見る思いに囚われた熊二は断腸の思いであつた。と、その時、大儀見がやつて来て、熊二に呼びかけた為、彼は現実に戻つたのであつた。

この翌日、熊二は独り校外の森林に赴き祈つた。聖書を一読しようとする、マタイ伝第十一章二十八節の聖句が目に入った。それは

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」（マタイ十一・二十八―三十）

という箇所である。熊二は、「基督の愛ある語調と文辞の優美なるとに心をうたれ暫時茫然」とした。そして、これを契機として「真理の微光」が「暗淡たる胸次に輝」き渡つて来たことを知る。結果的に、ヘルプス夫人の指摘した「思郷病」は熊二の心理の奥深く潜んでいたものであり、その「病」こそが熊二を基督に近づけるきっかけになつたことが理解される。

五 ヘルプス師

このように、徐々に夫人によつて導かれ行く熊二であったが、ヘルプス自身の導きはどうかであつたか。

⑮余が最も注目したるはヘルプス氏なり、氏の言行は古人に耻ぢず吾人の表すへきふし〜いとも多かり、師は余に聖書を教へたることなし、されど躬行実践を旨とせらるゝかゆへに師に親炙したる書生は知らず〜氏の徳に同化せられたるもの多し、(二)

ヘルプスは聖書を教へたりはしない、その人の言行(存在)がそのままキリストの愛の体現であつた、ということである。「氏の徳に同化せられたるもの」の一人で熊二もあつた。先に見たように、もともと幕臣として明治新政府の中心になつた薩長藩士に対する怨念があつたが、そのような「仇恨鬭争復讐的の情緒」に支配されている自らを「かゝる妖魔の巢窟」と言い、ヘルプスに接して、マタイ第五章四十三節以下を「金科玉条」とするまでに変化していったという。それは「あなたがたも聞いている通り、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言つておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(マタイ五―四十三)という箇所である。熊二は、この聖句を実践しようとする。

⑯熟ら思へは余が讐敵なる薩長人士こそ余をして今日の況遇に至らしめしものなれ、彼等なかりせば余は決してこの国に渡航は爲まじ、されはいかでヘルプス氏の音容に接し生ける聖書を読みて高尚優美なる基督にある真理を想見するを得ん、余は自今而後心を化へて新にし悪に勝るゝなく善を以て悪に勝へしと翻然覚悟し来れば、積年鬱々として胸間に横はりし密雲もや〜霽れ渡りて心神の爽快なること清める秋夜の月の如く、常に煩悶に堪ざる重き荷も今は基督の輓となりていと容易し、余は不覚涙に咽ひつゝ感謝したりき此迄不注意に看過したるかの馬太伝五章の四十三節以下の如きは余には金科玉条にして最も貴く覚へたり、(二)

熊二は長州藩士津川良蔵が学資に困つてゐる状態を見て、彼に自分の学資を分け与えよ、と言う申し出を行つたのである。あれほどの「讐敵なる薩長人士」に対してである。驚くべき変化である。

⑰当時余か同舎生の中に長州藩士津川良蔵といふ人あり、(中略)予か学資金の内百ドルは津川へ与へたまはれと言ひしに、師は不思議に思はれけん、(中略)兎に角彼に与へたまへといひて師の室を出てつゝ心に満足を覚へたり、薩長の人士と聴けば余か怒髪は上指し目眦も裂けんとする思を爲したるは昔日の余にして、今は怨も仇もつゆあることなし、余をしてかく平和の況遇に闊歩せ

しむるは基督の愛余を励ませしものなりと思ひ居たり。(二)

かくして、熊二は、基督教徒としての実践を行うようになる。この変化に際しては熊二は羅馬書第十二章にも触れている。

「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」と書いてあります。「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」
悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。

(ローマの信徒への手紙第十二章十九)

正に、この聖句の言葉通りのことを熊二は実践した。「基督の愛余を励ませしものなり」と思い、その「平和」の境地に近づいて行く。

このように変化して行った熊二ではあるが、しかし、いざ「受洗」の話となるとそれは別問題であった。洗礼は「虚礼なる心地」がし、「外貌」のこと、即ち外側の形式であつて、人間の内面には関わらないものだと考えていたのである。この熊二に対して、ヘルプス夫人は次のように説いた。

⑱若し日本人にしてキリストを信じ受洗するに至れば無宗教なる米人をしてほとんど慙死せしむるならんこれ即ち有力なる伝道なら

すや (三)

日本人であるあなたが受洗すれば、無宗教であるアメリカ人に対する有力な伝道となるはずだ、と。熊二は、この夫人の言によつて、結局受洗を受諾するのだが、それでも、受洗とは「外貌」つまり形式的な事に過ぎない、と頑なに思い込んでいたらしい。

この後、熊二は、松田為常という薩摩人をたまたま窮状から救うが、その「薩摩」という出身を聞いた瞬間、自ら「苦しき声」を発し、そういう自分を省みて、自分の「信仰の如何に薄弱なるかを悟りぬ」(三)とも記している。信仰の深まりは、一氣にはなく、徐々に種々の体験を経てなされるものであることが理解される。松田を歓迎し、ホープカレッジにて学べるように計らってくれるハーランドの人々に接し、熊二は次のように述べる。

⑲基督教は卑屈の妄念を拭ひ去り人をして高尚優美の地に進ましめ再び本善の性に復らしむる元動力たることを感じたりそは余か日本にては外国人としいへは必ず禽獸視し共に齒ひせざるものゝ如し猜疑の念は凝りて劍の光となり媚嫉の情は発して鎗の血となる、そを神州の精氣と称へ、旭日に匂ふ山桜よりも美しく思ひ、(略)自らしたり顔なるこそ無慙なれ、余が邦人の着眼をして高尚ならしめ理想をして優美ならしむるにはこの基督教を度外にして何をかせん (四)

「高尚優美」という人間の「本善の性に復らしむる」原動力、それが基督教であるという理解が進む。そして、日本における外国人への対応の仕方や偏見に思いを致し、それら日本人の「猜疑」「媚嫉」を「高尚」「優美」に変えさせるためには基督教しかない、とも思うようになるのである。

また大儀見が腸チフスにかかり、同室に寝起きしていた熊二も感染し、四十度前後の熱が続くということがあった。漸く快方に向かったものの、その時熊二は視力を失いかけていたのである(四)。幸い周囲の友情と親切によって全快するに至るが、その間の「鍛錬」によって熊二は次の七か条をメモするに至る。

(便宜的に引用者が④から⑥まで記号を付ける。)

④吾人の信仰に冷熱あることは絶へず聖霊の御露に浴せざるが為めなり

⑤一時の感動によりて動き熱心の冷却せる時は胸中に空間を生ず外物はこの時を窺ひて其間に働きを為せり(後略)

⑥吾に膏を洒きといひ生靈常に在すことは基督の聖の聖なる所なり
⑦第一のアダムは罪惡の模範(中略)第二のアダムは神聖の模範として世に頭はれ墮落したる人性を神の肖像に改造せんとす吾人は之を師表として仰き不知不言の間に同化せられて更生することを得へし

⑧(前略)第二のアダムとして聖善の靈あらされは神と儔なる能は

す是れ基督の人性と聖善の靈とを一身に合せて世に臨み給ひし所以なり

⑨基督の奇蹟は哲理に合ふや否やを問ひて後基督を信するにあらず基督は吾人が理想する聖の聖賢の賢なる者なればなり

⑩神の存在神の性質を探求するの必要なし神は存するにもせよ存せざるにもせよ基督は神を敬し人を愛し給へり故に敬神愛人は吾人の義務として為すべきことなり(五)

⑪④は、自らの信仰が一貫しない現実とその理由について述べている。「絶へず」「聖霊の御露に浴」することが必要であり、聖霊(生靈)によって満たされない「空間」を作ってはならないこと。⑫⑤は「第二のアダム」としての基督が、墮落した人性を「不知不言の間に」神聖なるものに更生して下さること、そして⑬⑥は聖賢基督に対する絶対的な信仰と「敬神愛人」は基督を信する自分にとって「義務」であること、以上を述べている。この数か月に及ぶ病と失明への恐怖とそれからの脱出、このプロセスを経ることによって、熊二は、相当な信仰の深みに到達したとも言える。それは、病という形をとって起こった主の「鍛錬」でもあった。これらについては高塚論にも言及はないが、熊二の信仰の深まりが見られる部分であり、病気が人間に「特に求道中の」何を齎すか、典型的な体験とも言えるものであるため、特筆しておきたい。

六 ホープ校卒業後の進路

しかし、である。ホープ校卒業後の進路について、ヘルプス夫人との問答があった。熊二は学資があれば、「インジニール」(エンジニア―引用者注)の道へ進みたい、と答える。夫人は言った。

②日本にて鉄道を布設し電線を通し橋梁を架設し道路を開通する等の事業は今後益々頻繁ならんとすされどこれ等は文明国の外部を装点するの具に過ぎず一国の元氣なる善良の心志を助長し愛國の精神を鼓舞する豈にインジニールの能する所ならんや(五)

つまり、夫人は鉄道や電線や橋梁、道路などのために働くのは、それこそ「文明国の外部を装点するの具」にしか過ぎない、内部(人間性)を良きものにするために働くことは、エンジニアがでることではない、即ち「基督教によりて人物を養成せよ」と、熊二に宣教師(牧師)の道を勧めたのである。だが、この時の熊二は「信徒として世に在るの益たることを知れと自ら進んで伝道者となり福音を余か邦人に伝播するの勇氣なきを如何にせん」と思った。即ち、クリスチャンとして社会人の一人であることは有益であろう、しかし、自分が伝道者となつて福音を説くというほどの「勇氣」はない、というのが本音であった。当然と思われる。

この時、親友にエミール、ヴハナマという優等生がいた。彼は、神学校に入つて福音伝道に携わることと告げ、熊二が自分も夫人に勧められたことを話すと、熊二にも是非そうすべきであることを強く勧めた。熊二はこの友人に軽薄な答えを与えることはできないと思ひ、「熟考」して返答することを約束する(五)。

ここで難問は、日本で彼の帰国を今か今かと待つてゐる人々のこととであつた。既に、ホープを卒業すれば帰国すると約束もしてゐる。帰心矢の如しでもあるが、熊二の中には、次のような思ひもあつたのである。

②余は芋武士の膝下に匍匐して百や二百の月給に八字の髻を擦断して快と称することは如何に心を鬼にしても出来得へきことゝは思はず商人たらんか、余か僻性は投機流の詐術を嫌悪してこれを為さしめず、つまり帰邦の後には少許りの金を得て妻兒を養ひ身を山林に投して孤山処士の生涯を送るの外は意に適することはあらず(六)

熊二にはまだこのような誇り(プライド)があつた。「芋武士」とは、薩長の人士のことではないのか、彼等に対する憎悪等ももう既に無くなつたはずではなかつたのか、という思ひも読者には湧くのだが、それほど容易に放擲、放棄可能なものでもなかつたようだ。帰国したとしても、薩長の人々の下になつてわずかの月給のた

めに働くのは嫌だ、かといって商業にも携わることには性格的に無理である、このままだと、帰国しても妻子と共にわずかの生活費を得て、都会から離れた山里に住み、孤独な生涯を送るしか道はない、と思ったのである。

卒業も近づくと頃、熊二にはニューブランズウィックの神学校で学ぶうとするならば学資も出そう、という伝道会社も現れた。熊二は「伝道師と為るや否やは別問題として神学研究の爲めニューブランズウィックに到ることを約せり」（七）と、遂に神学校で学ぶことを決意する。あくまでも「伝道師と為るや否やは別問題」という前提である。日本で首を長くして待つ人々には委しいことは告げずに、卒業後は、諸州を漫遊してから帰国する、とだけ伝えることにした。

七 〈聖霊体験〉

八年を過ごしたハーランドを出発し、ニューブランズウィックに向かうことになるが、途中、グランドラーベッツにおいて旧知のモオンダイキを訪問した。彼はイギリス教会の牧師として名望ある人物であり、ホープではラテン語の教師でもあった。翌日は日曜なので、「晚餐式もあれば必ず教会堂に出られよ」と彼は熊二を誘う。翌日の朝食後、人々は日曜礼拝のために教会を目指して馬車で出掛けた。鐘が鳴る。大きな教会は静粛にして静寂、音楽（讚美歌）と共に「神聖の空気に圍繞」されたような感じになる。突然、不思議

な事が起こった。

②此際疾風迅雷の如き勢をもつて余か上に襲ひ来りたるものあるやうに覺たるや、一種名状すへからざる感ありて余が神経の非常に過敏になりたるを知れり。パンを喰ひ杯に飲むの時は手は震へ口は噤し涕泗は横流して禁する能はず、余をして或疾病の発作にはあらずやと疑わしめたり（八）

「疾風迅雷の如き勢をもつて余か上に襲ひ来りたるもの」とは何であつたらう。人々は顔色の悪い熊二に休むようにと言ひ、彼は言われるままに部屋で休もうとするが眠ることもできず、聖書を繙く。その時、「神の恵と基督の愛」が迫つて来て、聖書に涙が零れ落ちた。

③余は過ぐる八年余も天父慈悲の下にありながらその心は未だ全く塵世の罪惡の羈絆を免かるゝことを得ざるを悟り、翻然罪を悔ひて祈禱せり。（八）

熊二は、自分は八年余りも天の父なる神の慈悲（愛）を受けながら、尚且つ俗世の罪惡にまみれている、という自らの「罪」を自覚するに至る。そして祈った。この成り行きを見てわかるように、それは突然やつて来た。モオンダイキ夫人にこのことを告げると、夫

人は「神は実に君を救ひ給へり神は愛なり」と大いに喜び、「君今後イースト（東米）に赴かは必ず誘惑も試みもあらん、幸に今日のことを忘るゝ勿れ」と言った。モ氏も帰宅後、事情を知って熊二のために祈祷をし、有益な励ましを与えてくれた。モ氏宅を去り、ニューブランズウィックに向かう車中で、熊二は次のように思う。

④ グランドラベッツにて遭遇せし事の如何にも奇異にして余か行末に大なる関係の有ることゝは知れど今はこれを了解するによしなし、追回すれば余か行路は岐路より岐に入りて、かく長き歳月を平易に送り来りたるは故こそあらめ、今行く途の利害は全く天火に聴て直往勇進するに如かずと決心せり。（八）

「疾風迅雷の如き勢をもつて余か上に襲ひ来りたるものあるやうに覚」えた熊二にとつて、この「奇異」なる体験は恐らく（聖霊体験）（注十二）であろう。故に、その事情を理解したモ氏夫人は「君今後イースト（東米）に赴かは必ず誘惑も試みもあらん、幸に今日のことを忘るゝ勿れ」と忠告するのである。神の働きをする者が悪魔の試みを受けることは、イエスが荒野で試みにあつたこととして聖書に記されている。モ夫人の忠告はこれに拠つており、「幸に今日のことを忘るゝ勿れ」とは、神の御加護があるということをお忘れな、という励ましでもある。熊二の「翻然罪を悔ひて祈祷せり」という出来事は、「余か行末に大なる関係の有ること」かつ、

「かく長き歳月を平易に送り来りたるは故こそあらめ」という了解に導いて行く。この八年間という長きに亘り、最初は言葉もまならぬ異国の地で今日まで「平易に送り来」ることができたという、その恵みの大きさは、何か「故」（訳）があるのだ、そして、同時にこれからのことに深く関わっているのだ、という熊二の了解である。その「故」が現在わからなくとも、今後自分が「行く途の利害は全く天火に聴て直往勇進するに如かずと決心せり」というように、これからは全て、何が起こつたとしてもそれは神の御導きであり、それに自分は従おうという「決心」である。

*

熊二の「めぐみの旅路」はここで終わっている。この後、ニューブランズウィックの神学校で学び、明治十五年帰国することとなるが、その数年間が、彼を、あれほど拒否していた「伝道者となり福音を余か邦人に伝播する」という道へ導いて行くことになる。その決定的な岐路がこのグランドラベッツでの体験であつた。この体験について工藤論には言及がないが、高塚論では「木村の覚醒・伝道者への道」と題し、「大なる覚醒」「霊の襲来」「靈感」「開眼」と呼んで重要視している。熊二がこの日曜を「余か生涯にとりては最記憶すべきものにてありき」と記しているのも、この時こそが、熊二が伝道者としての道を歩む決心をしたからであることは、もはや言うまでもあるまい。

(注)

- 一、当日の「講話」は本論第二(熊二の小諸移住の理由)が中心であったことをお断りしておく。『木村熊二日記』は東京女子大学比較文化研究所蔵の「木村文書」の一部であり、一九八一年三月、名倉英三郎教授監修のもとに同研究所から初版が刊行された。その後、一九九三年度に品切れとなったため、「木村熊二日記 正誤表」(一九九一・一)、『翻刻版 木村熊二日記』(一九九二・一刊)及び未公開の資料等で増補した『校訂増補 木村熊二日記』が二〇〇八年三月に刊行された。
- 二、青山なを執筆の「木村熊二」(新訂版『島崎藤村事典』伊東一夫編、明治書院、昭五十七)には、「明治九年五月マスター・オブ・アーツをえてコレッジを卒業、九月にはラトガス大学の神学校に進み、「明治十五年九月帰朝」とあるが、ホープカレッジ卒業は、明治十二年である。
- 三、関五太夫は、小諸の資産家の出で、早くから上京して学び、藤村と同時に受洗し、明治学院にも同時に入学している青年である。平成二十七年八月二十二日の小諸における藤村忌の際、関五太夫についてのその後の消息を「小諸義塾の会」の方々に伺ったが、現在、実家はなく、ご縁の方々についての消息も不明とのことであった。
- 四、『木村熊二・鏡子往復書簡』(一九九三・三、東京女子大学比較文化研究所)を見ると、妻鏡子へは感情をストレートに表現しているものが多い。当然でもあろうが、一例を挙げれば、頻繁に帰国を促す鏡子の手紙に「百度千度御申越相成候とて時の来り候までハ帰国いたし兼候間左様御承知、どうぞ以後ハ決して帰国之事御申越被成間敷候」(明治十三年十二月十六日)というものがある。鏡子の立場に立てば、既に滞米十年が過ぎようとしているわけであり、熊二の帰国は彼女にとっては最重要問題であった。
- 五、青山執筆の「木村熊二」(伊東一夫編『島崎藤村事典』新訂版―注二に同じ)では、「熊二の信仰」については「めぐみの旅路」に詳しいとしつつ、「儒学に育った頑固な武士が、異郷の孤独の空の下でキリストの恵みをうける始終が真に迫って記されている」とあるのみである。
- 六、工藤英一「明治初年における士族のキリスト教受容―木村熊二の場合―」(一九七〇年十一月『経済論集』明治学院大学産業経済研究所)は、熊二の滞米中の研究については最も早いものであり、ハーランドのホープ教会記録を確認し、受洗の年次の特定も行っている貴重なものである。但し、ホープ卒業後、ニューヨークスウィツクの神学校に出発する際、グラントラーベツツにおけるモオンダイキ訪問時に起った〈聖霊体験〉について言及がない。
- 七、太田愛人『明治キリスト教の流域』(一九七九年三月、築地書館、後、中公文庫)。この書物については大田正紀氏のご教示

をいただいた。

八、高塚暁『小諸義塾の研究』（一九八九年一月、三一書房）は、

小諸義塾の研究として、また、木村熊二研究としても、最も詳細な研究書であると言つてよい。当然、滞米中の熊二のキリスト教入信についても丁寧な論究がなされている。「めぐみの旅路」への言及は本論で触れた通り。

九、昭和五年五月「日本聖書雑誌」、昭和六年三月『内村鑑三追憶文集』所収。引用は『内村鑑三集』（明治文学全集三十九、筑摩書房）による。

十、下山『桜の実の熟する時』における〈異界〉（『近代の作家 島崎藤村』明治書院、二〇〇八年二月）を参照されたい。

十一、『キリスト教大事典』（改訂新版、教文館、一九九五）によれば、「聖霊は神の力」であり、パウロは「罪・死・律法から人間を救いだし、信仰・義・喜び・平和を与えるのは、聖霊という存在様式によつて人間の中に住むキリストである」と考えているとされる。熊二はここで、自らの「罪」を自覚し祈祷した、とあることからすれば、この体験がキリスト教の世界で言われる〈聖霊体験〉と見ることは可能であろう。

※『聖書』の引用は『新共同訳―旧約聖書続編つき』（一九八七）に拠った。